

ブックレット 『東亜同文書院大学と愛知大学』の

編集に携わって

東亜同文書院大学記念センター委員・入試広報課主幹 山下 輝 夫

はじめに

大学に対する伝統への評価

大学における伝統は、大学の生い立ちと建学の精神を背景とする大学独自の学風、教育の特色などを表現しています。そして伝統は、大学の歴史のなかで先輩から後輩へと受け継がれていく学生集団の足跡の表現であります。大学に於ける伝統への評価は、大学自体の永年にわたる教育研究への努力もさることながら、大学から巣立っていった卒業生の社会での活躍が、オーバーラップした形で社会に於ける複合評価でもあります。

大学における歴史と伝統は大学評価の一つとして理解され、それ自体に固有の価値を意味付けており、社会的評価の高さを表現しています。ことに、私立大学にあっては大学の生い立ちと建学の精神は、大学の伝統を性格づける底流をなしています。

愛知大学は敗戦の翌年、一九四六年に創立されました。戦後最初の旧制大学として設立認可された愛知大学は、日本の大学でただ一つ、敗戦という歴史的な時代背景のもとに設置された大学であります。そして「日本国憲法」の公布と期を一にしています。「愛知大学設立趣意書」の冒頭には建学の趣旨を次のように述べています。

「我日本は長期に亘る今時戦争に依て物質的精神的に荒廃せしめられ、殊に其の結果は惨憺（ニさんたん）たる敗戦を招き正に崩壊の危機に立つと言うも過言ではない。今斯（ニカ）かる崩壊を免れんするならば、事をして茲（ニココ）にいたらしめたる旧き日本の誤れる指導と積弊を一掃し、新しき日本として更生するの道を択（ニえら）ぶ外ないのである」

「斯（ニかく）の如き我が日本の新しき出発に際して、当面解決を要する諸種の問題山積すると雖（ニい）えども、就中（ニなかんずく）、学問、思想、文化を旺（ニさかん）に興し、教養ある有為の人材を養成することは、其急務に

して、最も基礎的なものの一と言ふべきであらう。我等相謀（＝はか）つて茲に愛知大学を設立せんとする所以（＝ゆえん）は、実に斯かる客観的要請に呼応するものにして、一言を以て之を言えば、世界平和に寄与すべき日本人文の興隆と有為なる人材の養成と云うに尽きるのである」

愛知大学は、日本の私立大学で二九番目に誕生した大学です。明治時代からの古い歴史と伝統を持つ東京・京阪神の私大から見れば歴史の浅い大学ですが、その生い立ちは他の大学には見られない異色の存在であり、東亜同文書院大学という歴史の遺産を継承するという特異性をもつ大学であります。

風化していった

同文書院大学の位置づけ

『愛知大学十年の歩み』は、愛知大学創設に至るいきさつを次のように述べています。

「本間学長、小岩井教授、その他同文書院大学の教授（上海からの）帰還の報が伝えられるや、内地において他の大学に転入学手続修了者、手続未修了者、或は新に復員せる者等は連日の如く、或は手紙で或は自ら神田の（同文書院大学清算）事務所を訪れ、新大学の設立を希望する者が極めて多かつた。

東亜同文会会の支援による新大学の設立を断念された本間小岩井両氏は、事ここに到っては有志のものが相集まり自分の力に設立する外はないと決心された。（中略）

新大学の設立するについて、最終的決定を行うため、本

間、小岩井両氏は鈴木擇郎氏、神谷氏、本田氏等に図られ、昭和二十一年五月三十日東京九段下の若喜旅館に同文書院大学の教職員を召集せられた。当時、食糧事情は極端に悪く、交通事情も最悪の時代であったが参会者は十三名に達し（氏名を略す）此の最初の会合に於いて設立の見透しその他につき種々の意見が開陳されたが、積極的な主張が大勢を支配し、新大学の設立することに最終的決議がまつまり、九月開校を目標に具体的活動に入ることになった。」

（『愛知大学十年の歩み』昭和三十一年刊。十一頁～十二頁）

愛知大学は、中部地方唯一の旧制法文系大学として設立されました。当時、中部地方に大学は名古屋帝国大学医学部のみで、文科系学部の大学では、中部地方最初の大学としての地位を占めています。しかし、昭和二十四年に「新制大学」制度が充足し、以降数年のうちに名城大学、南山大学、愛知学院大学が誕生する訳です。愛知大学が特異な設立の経緯と旧制大学の輝かしい歴史を持つとはいへ、戦後半世紀にわたる時間の経過によって時代認識も希薄となり、それは教育制度への理解をもつ一部識者か、年配者の間での認識であり、若い世代にはその特異性の理解力は乏しいものがあります。

創立以来愛知大学は、ことさら東亜同文書院の関わりを主張しませんでした。それはGHQの圧力や、戦後の風潮の中で植民地大学への謂われなき視線を意識してのことでも有りました。しかし、東亜同文書院関係者が創る愛知大学だからこそ、社会は支援をおしまなかつた。その辺のいきさつは、創設者本間喜一先生の記述に見られます。しかも、創設期の学部生は書院生が大勢を占め、教員の中心も同文

書院の先生方、創立から昭和三十七年度までの学長は、林学長、本間学長、小岩井学長と同文書院関係者で有ったことから、草創の頃はあえて同文書院と言わずとも、愛知大学

は同文書院の流れをくむ大学として、世間一般に認識されていきました。そして、『中日大辞典』の刊行、国際問題研究所の中国研究の取り組み、中国関係専攻コースの配置はその実績と伝統を受け継ぐものとして評価されてきたのです。

創設に携わった第一世代が去り、同文書院出身の教職員・学生の指導と影響を受けた第二世代も数少なくなり、愛大の設立の経緯への関心すら希薄となり時は流れていきました。こうしたある時期に、非常勤講師として教壇に立たれた、同文書院出身のジャーナリスト氏は「今の愛大では先生方も学生も誰も同文書院を知らず、寂しい気持ちとなった」とお話になったと伺いました。今から一五年程前のお話です。

その頃の『愛知大学案内』には、「戦後、東亜同文書院大学、京城帝国大学、台北帝国大学から引き揚げた教職員によって…設立された。」と設立の経緯が記載されて来ました。この記述は一面の事実では有りますが、「実事求是」では有りません。私たちが知っている歴史の本質がわざと避けられているのです。この決まり文句は、先に述べた草創の頃の深慮から生まれた表現で有りましょう。より正確には「戦後、東亜同文書院大学の教職員・学生が中心となって…設立された」と記載されるべきであります。

東亜同文書院大学

記念センターの誕生

ところで、こうした経過の中で九一年（平成三）に、東亜同文書院大学の同窓会「滬友会」有志は、東亜同文書院の偉業を後世に伝え、日本と中国の善隣友好に貢献する学術研究を表彰するため「東亜同文書院基金会」を設立し、その業務を同文書院と縁の深い愛知大学に付託されました。「東亜同文書院基金会」設立は、同文書院と愛大の両校関係を語るとき、意義ある出来事として留意されるべきでしょう。その年「孫文・山田兄弟辛亥革命資料」が愛知大学に寄贈され、基金会の設立以降、滬友会と愛知大学は急速に親密な関係へと改善されて行きました。この経過の中で大野一石元教務課長（書院四六期・旧制五期）は大きな役割を果たされました。「東亜同文書院大学記念センター」は、こうしたいきさつによって一九九三年五月三〇日に誕生したのです。

旧本館（現「大学記念館」）の修復工事をまっけて四年間の経過の後、九七年に「東亜同文書院大学記念センター展示室」を開設しましたが、その開設記念式典で石井前学長は、「一九〇一年創立の東亜同文書院の歴史と、創立五〇周年を迎えた愛知大学の歴史が一本の太い糸で繋がった思いでございます。思い起こしますと、一九九二年、学長に就任以来、同文書院大学記念センターのことを霞山会と滬友会の関係の方々と協議を続け、東亜同文書院大学記念センターという組織を創りました。その主旨は東亜同文書院

大学の教育、研究上の業績を我々の手で明らかにし、後世に伝えることであります。端的に申しますと本間先生、小岩井先生、鈴木擇郎先生方、同文書院ゆかりの先生がたから直接教えをうけた（東亜同文書院大学）卒業生の皆さんが沢山おみえになります。しかし、大学に残っている者と言いますと、私たちが最後の者であります。したがって、私たちが大学を去ったあととは、おそらくそういった事は出来ないのであろう。我々の手で東亜同文書院の優れた業績を後世に伝えていく義務があると言ふことで出発しました」と語られています。石井学長は本学創立者本間喜一学長の最後の教え子であり、同文書院記念センター委員長今泉潤太郎教授は、『中日大辞典』の産みの親、鈴木擇郎教授の後継者でもあります。

「温故知新」、愛知大学の故事を訪ね愛大の存在を知らしめ、東亜同文書院を「幻の名門校」でなく「語り継がれる名門校」とするため、新たな文化活動の展開を、石井学長・今泉委員長等と滬友会代表委員からなる「東亜同文書院大学記念センター」のメンバーで語り合いました。



愛大の歴史再発見

「前身校・東亜同文書院大学」

創立以来半世紀を経て、愛知大学の歴史認識も希薄な状況が踏まえ、同文書院大学記念センターは、その一つの事業として学生をはじめ若い世代へのメッセージとして『ブックレット東亜同文書院大学と愛知大学』一集、四集を刊行（九三、九六年）しました。

この刊行事業に私は記念センター委員と広報課長の二足の草鞋で、企画・編集を担う事になりました。

すこし編集について述べます。『ブックレット東亜同文書院大学と愛知大学』各集執筆の概要は『第四集』三頁、五頁で、小田啓二氏が適切な紹介をして下さっているので割愛いたします。

『ブックレット東亜同文書院大学と愛知大学』の執筆者は、愛知大学草創期の語り部として、敗戦後、中国から引き揚げ愛知大学の創設に参加した東亜同文書院生の諸先輩にお願いをしました。小崎昌業氏（愛大旧制一期・書院四二期、一集執筆）、釜井卓三氏（愛大旧制二期・書院四四期、一集執筆）、吉川績氏（愛大旧制二期・書院四三期、二集執筆）、小田啓二氏（愛大旧制二期・書院四四期、四集執筆）、小林一夫氏（愛大旧制三期・書院四四期、一集執筆）、松山昭治氏（愛大旧制三期・書院四五期、二集執筆）、川原寅夫氏（愛大旧制四期・書院四五期、二集執筆）、鈴木康雄氏（愛大旧制四期・書院四六期、三集執筆）愛大卒以外で、特に伊藤喜久蔵氏（書院四〇期、二集執筆）、日野晃

氏（書院四〇期、三集執筆）にご登場いただきました。日野晃氏は「書院・上海・日本——わがこころの記」を脱稿されて程なく入院され、第三集を病床で手にし刊行を喜んで下さいましたが、翌一九九六年の春永眠されました。紙面をかりて心からお悔やみを申し上げます。

報道関係者では、毛井正勝氏（朝日新聞名古屋本社編集委員：当時、二集・四集執筆）、福田哲夫氏（NHK名古屋放送センター番組制作ディレクター：当時、三集執筆）、中野圭介氏（日本経済新聞名古屋支社記者：当時、四集執筆）とご協力をいただきました。学内からは、藤田佳久教授（文学部、一集執筆）、加々美光行教授（現代中国学部長、四集執筆）に参加していただきました。また、米・カリフォルニア大学バークレー校訪問教授の林文月先生の台湾「聯合報」掲載レポート「上海同文書院と愛知大学」（三集）の翻訳は、今泉潤太郎教授（現代中国学部・同文書院記念センター委員長）にお願いました。

紙面に同文書院当時の写真を挿入し、時代背景のイメージアップと読みやすくすることに心掛けました。掲載写真の多くは滬友会所蔵の東亜同文書院各期のアルバムより転載させていただきました。写真提供とキャプションについては、同文書院記念センター委員・滬友会幹事の賀来揚子郎・小崎昌業両氏のご援助を受けました。

『ブックレット東亜同文書院大学と愛知大学』第一集「はじめに」で「この冊子は、東亜同文書院大学記念センターの発足を期に、愛知大学の学生をはじめ若い世代に、『幻の名門校』と言われて久しく、愛知大学の生みの親でもあった東亜同文書院大学を知り、愛知大学との関わりの認識を

深めていただくことを期待して刊行した」と記述しました。

学内書店での購読もさること

ながら、現

代中国学部、

法学部、文学部のゼミのサブテキストとして利用されるなどで、愛大生に浸透がはかられました。発行部数は一集、四集合わせて五万冊。うち市販冊数は約一万冊、版元の六甲出版のご尽力で、東海地方中心に全国の主要書店で販売されました。中国関係書で知られる東方書店の雑誌『東方』で、九四年一月第二集が「いま評判の中国関係書」ベストテンの第二位、翌年に第三集が一位にランクされる栄誉を受けました。全国の公共図書館、高校図書館等々への寄贈も行いました。

読者から寄せられた感想文

『ブックレット東亜同文書院大学と愛知大学』刊行と共に全国から三五〇通の「読者感想はがき」が寄せられ、版元の六甲出版が驚く程の反響を呼びました（『同文書院記念報』各号に掲載）。寄稿者は、同文書院卒業生、同ご遺族、愛大同窓生、教育関係者、学生の父母、在学生と一般市民



東亜同文書院大学と
愛知大学

の方々です。少し長くなりますが数通引用致します。

「建学の精神と歴史の重みについて改めて知ることが出来ました。長男が法学部に在学中。父の長兄は東亜同文書院生として上海に留学していたと子供のころ聞かされました。残念ながら、満州に於いて昭和十年頃死亡していますので、詳しいことは知りませんでした。この本で亡き伯父を偲ぶことが出来たように思います。中国との関係に於いて、素晴らしい信頼関係が続き、いつまでも友好的交流が出来るよう祈ります」

(名古屋・団体職員Oさん・五五才ー当時；以下同じ)
「私の長兄は東亜同文書院卒、また孫二人が愛大在学、さらに三男も愛大卒であるごとく、愛大が好き。そして、私大らしい善い校風があることを本書により知った」

(西春日井郡・Nさん・八四才)
「不幸な時代の青春の記録」に特に感動。戦争中、反戦の学生たちは、同大学の真の誇るべき英傑であると思います。同大学の教授でしたがこの記録ほど詳しくは知りませんでした」

(西宮市・大学名誉教授Sさん・九四才)
「かつて在学した者として懐かしい限りです。日中事変の際、やむなく軍に協力し同文書院の名を傷つけました。それが残念でなりません。本来書院は日中友好を目指していたのですから、何とも残念です」

(名古屋市中村区・高校教員Mさん・六四才)
「東亜同文書院卒業生として、大変嬉しい発刊でした。と同時に愛知大学への特別な愛着心が沸いてきました準備校的な気持ちでいっぱいです。母校なき今となつては……」

(大阪府・大学教員Kさん・七四才)
「日中友好のための貴重な記録です。ますます愛知大学が東亜同文書院の伝統を継がれんことを」

(西宮市・Nさん・七一才)
「私の通っている大学でありながら、知らずにきたことがたくさん書いあり、改めて愛大の歴史と愛大の良さを発見した感じです」

(名古屋区・学生Hさん・二二才)
「亡き夫の学び卒業した両校、夫の生前耳にした事柄や言葉が甦り、また知らなかった事もここで知り、今更にこの両校に学ぶことのできた夫の誇りを認識することが出来ました」

(町田市・Nさん・六五才)
「とても内容のある良い本だと思いました。我々の世代の一世代前の歴史と伝統と言うものを感じました。中国と日本の立派な教材です。地元の大学であるので、強く興味を持ち何回も読みました」

(知多郡・会社員Sさん・四四才)
「私は同文書院四三期生です。このたびの第二集素晴らしい出来です。各執筆者の中国への愛情が行間から読み取れ、国を越えたヒューマニズムに思わず目頭が熱くなることもしばしば。中国で暮らし、中国の体臭がしみた書院生ならではの名文です。「国際的教養と視野」を目指す愛知大学生、特に中国留学体験者の発表を期待しています。この立派なブックレットが未永く存続するためにも是非お願いします」

(岐阜県・自営業Tさん・六九才)

「第一集・第二集・第三集拝読。半世紀に及ぶ歴史と共に、戦前、戦中、戦後にわたって活躍してきたこの学校の歴史は、そのまま日本の近代史に残る貴重な記録であり、又、過去の歴史を反省することは、即ち未来の飛躍を裏付けるものである。心に残る三部作として後世に伝えたい」

(名古屋市緑区・元大学教員Kさん・七八才)



世に広がった

「東亜同文書院」評価

『ブックレット東亜同文書院大学と愛知大学・第一集』を刊行したのは九三年十月。以降、『第二集』九四年一二月、『第三集』九五年十月、『第四集』九六年十一月です。時あたかも、九四年は学徒出陣五十周年、九五年は戦後五十周年、九六年は愛知大学創立五十周年との節目のときでした。

「同文書院記念センター」設置、そして『第一集』の刊行以来、東亜同文書院についての報道は愛大の関わりを含めて、朝日、中日、読売の各紙をはじめ、日経、毎日、日本と中国、東海日々、東愛知、雑誌では『財界』、『月刊アジア』、海外では台湾の「聯合報」にも掲載されました。さらに、NHK総合テレビの四五分特別番組「上海・幻の名門校〜東亜同文書院生の軌跡から」の放送、NHKラジオ日本「中国の大地を踏んだ日本人学生たち」二日間各一時間の海外向け放送も行われました。

愛知大学創立五十周年をはさんで、二年半年の間に五八回の報道が展開されました。一つの大学が、しかも半世紀を経てこのようにマスコミで報道されることは、全く希有なことであります。東亜同文書院ならでのことと言えます。こうした中で、東亜同文書院は再評価され、愛知大学の歴史的存在についての社会認識も広がりました（日刊紙は地元中部版中心の報道）。

「同文書院記念センター」開設の記念講演で花を添えて下さった尾崎秀樹日本ペンクラブ会長（当時）は、日経新聞（九三・十・二五）で「台湾から引き揚げ学生であった私は、愛知大学への転校を希望したが、理科系だったため断念した思い出がある。東亜同文書院は（中略）学問の自由を尊ぶ学風のもとに、日中友好提携の人材を養成してきた。その建学の精神は愛知大学に引き継がれている。」と寄稿されました。

また、中国の知日派の最長老、孫平化中国日本友好協会長は愛知大学創立五十周年記念講演で「愛知大学は今年、創立五十周年ですけれど愛知大学の前身、上海同文書院の

時代から数えますと、もう百年になりました。一九〇一年に上海でその学校が出来たそうです。「中略」愛知大学という大学は、日本の大学の中でも中国とのいろいろな関係が深い、ゆかりの多い大学だと思えます。中国と日本の友好発展の為に活躍している上海同文書院出身の方々は少なくない、その中に、私たちの非常に親しい友人もおります。時間の関係上名前はいちいち上げませんが、愛知大学は私たちにとっては非常に親近感を持つわけです。「同文書院は」日中関係に熱心な方を養成したし、中国の留学生をたくさん養成しました。ですから今、日中間で各分野に活躍している方々は元の同文書院の方々、あるいは愛知大学出身の方々、数多くあると思います。愛知大学の歴史は五十年、ちょうど戦後の日中関係の歴史は五十年の歴史は五十年のわけです。「中略」愛知大学の五十年の歴史は、言わば中日関係史の重要な一側面とも言えると思えます。「一九九六年六月二二日開催「日中国際シンポジウム」報告書より」。

最近、内山完造先生（日中友好協会初代理事長）の著作を読んでいて、次の記述に巡り合いました。戦後の時期に書かれた、同文書院生についての認識を示す大切な記述と思われあえて転載します。「同文書院」第十三期から第四五期までの学生諸君と私達（内山先生夫妻）のつながりはつづいたのであるから、従って私というものが時々書院の同窓のように言われる栄光を忝うすることも無関係でないと思ふにや。こうして多くの学生諸君が今全国に散在し

ていられるのである。
（中略）私が二カ年間の全国行脚でお会いした人々だけ

でも、なかなか数えつくせない程である。希くば書院に学んだ人々はこの際総立ちになって日本と中国との友好運動に乗り出して頂きたいと思うのである。

昔の罪ほろぼしと言うと語弊があるが、今日の日本の亡国はその根本原因は中国及び中国人の認識の誤りであったことを思うて、この際是非日本人の対中国観の是正の為に一肌ぬいで貰い度いと思うのである」(内山完造著『花甲録』一四九頁、一五〇頁、岩波書店一九六〇年刊より)

孫平化先生は一昨年逝去されましたが、シンポジウムで、東亜同文書院生への評価と愛大の関わりについて述べられた事は、意義深いものが有ると言えましょう。また、内山完造先生は、引用文にも書かれていますが、戦前から戦中、上海の内山書店で書院生と語り合い、書院生が時代の中で、どのように生きたかを見つめて来られた方です。その先生が、書院出身者にこの様なメッセージを残され事を知り、心が休まる想いがいたしました。



「前事不忘 後事之師」

『ブックレット東亜同文書院大学と愛知大学』のキャッチフレーズを「日中戦争という苦難の時代に翻弄され、敗戦と共に半世紀にわたる歴史の幕を閉じた、幻の名門校、東亜同文書院大学」と表現しました。東亜同文書院の終焉の時期、書院生は「通訳従軍」「学徒出陣」に駆り出されていきました。日本の大学生が、戦地に赴き戦いの矢面に立たされた時代です。例えば軍部や当時の国策に疑問を抱いたとしても、戦争参加は日本国民として避けられない宿命でありました。戦後、戦没学生の手記『さけ、わだつみの声』が刊行され、多くの人々に読まれましたが、当時の学徒たちは悲痛な宿命を背負い時代に翻弄されたのです。

出陣学徒は、時代の被害者であると同時に加害者の顔を持たされる悲しい運命となりました。

東亜同文書院は上海にあった大学です。当然の事として、日本の大学では中国人に最も知られた大学だけに、中国の人々に強い衝撃を与えることになりました。書院生「通訳従軍」開始の直後、同文書院虹橋路校舎が放火により焼失することも、偶然ではないと思われれます。中国側の同文書院評価は戦後しばらくの間、この時期の後遺症を引きづる事になりました。時代の流れの中で、近年、東亜同文書院が果たした中国研究・教育と日中関係での役割が、中国の研究者の間で再評価されつつあります。

愛知大学は、東亜同文書院大学の苦渋にみちた戦争の時代を踏まえ、「愛知大学設立趣意書」で次のように述べて

います。「寔（まこと）に新日本の進むべき方向は旧来の軍国主義的、侵略主義的等の諸傾向を一擲し、社会的存在の全範域に亘って民主主義を実現し自らを文化、道義、平和の新国家として再建することに依り、世界の一員として世界文化と平和に貢献し得る如き者たらんとすることできればならない」。

『ブックレット東亜同文書院大学と愛知大学』は、創立以来、半世紀を経て愛知大学の生い立ちを世に問い、愛知大学の歴史と伝統の原点を再認識する資料として刊行しました。それは自ずと、東亜同文書院大学と愛知大学という二つの大学の消滅と誕生をとうして、日中関係現代史の断面、日中戦争の歴史への関心を呼ぶことに繋がりました。

「前事不忘後事之師」（過去を忘れず将来の師とする）、確かに半世紀も前、祖父母の世代の出来事です。いま若い世代はもちろん、働き盛りの世代も含め、日本と中国の不幸な時代の認識は希薄と言われています。しかし、愛知大学の創立者たちが直接関わった事柄だけに身近な現代史への理解です。時間的経過の点で言えば、慶應義塾大学で福沢諭吉、早稲田大学で大隈重信の故事が語られ、一世紀も前の設立の経緯と建学の精神が語り継がれています。愛知大学でも歴史的転換期の中で東亜同文書院大学の教職員・学生の結束をもとにして創られ愛知大学創立に到る故事はその歴史的背景をふくめて、時代を超えて語り継がれていく事柄と考えます。

おわりに 東亜同文書院の伝統を 受け継ぐ現代中国学部

ある研究者のインタビュアーに、元東亜同文書院中華学生部生で中国社会科学院教授（当時）史惠康先生は「時代が時代でなければ、東亜同文書院という学校は、とてもユニークで理想的な教育機関だったと思う。今のような平和な世にこそ、国家的な侵略の下心もなく、日中両国のために若い人が学ぶ、書院のような学校があれば」（水谷尚子「東亜同文会史論考——東亜同文書院に学んだ中国人」財団法人霞山会）より」と語っています。

現代中国学部は一九九七年、愛知大学創立五十周年を機に開設されました。私立大学創設者の建学精神が風化し、教養の特色を失いつつある今日、私学の再興のために、建学の精神を今日的諸課題を踏まえての具現化が要請されています。この課題に応え二一世紀へ向けて、愛知大学の飛躍を期する大学改革の取り組みとして現代中国学部が開設されました。現代中国学部は、愛知大学の半世紀にわたる中国研究・教育の実績を基として開設されたものであります。そして、現代中国学部は東亜同文書院の歴史を受け継ぐ愛知大学ならではの学部として、識者の評価を受けました。

二〇世紀の初頭一九〇一年に日中提携、東亜保全、世界平和の人材養成を目的に東亜同文書院は設立されましたが、現代中国学部は二十世紀初頭の二〇〇一年に、新しい世紀の日中関係を担う人材として、第一期生を世に送り出す事になります。東亜同文書院再評価は、自然の流れとして

現代中国学部を誕生させたとも言えます。五十周年の愛知大学にとって因縁ある時の利であり、愛知大学は没個性の大学から、個性派の大学として、新たな飛躍への道を歩むことになると言えましょう。

追記：本稿は昨年の春に書き上げました。その後昨年の九月に天津で、尾崎秀樹先生の訃報に接しました。先生は「東亜同文書院大学の伝統を受け継ぐ愛知大学が、現代中国学部を開設し、その意義ある法燈を顕在化させた」と、お言葉を下さったことが記念となりました。

名古屋テレビ制作「青春の中国」は、二月に地元東海地区のエリアで一時間番組を、三月には地元を含む全国放送を三〇分番組で放送、久しぶりの朗報です。名古屋テレビの海老名敏宏制作部長から、昨年春に連絡をうけ企画のお話をお聞きした時「五年前に『ブックレット東亜同文書院大学と愛知大学』読んで以降、この番組の企画を温めてきた」と「青春の中国」制作への経過を伺いました。その時、たしか五年ほどまえ名古屋テレビから電話をうけたことを思い出し、海老名部長の熱意を感じました。そして昨年の夏以来、東亜同文書院大学記念センター委員の立場からも、この番組の制作に協力させていただきました。

（二〇〇〇年一月）